席田平尾遺跡 1

－第１次調査報告－

福岡市埋蔵文化財調査報告書　第 1404 集

２０２０

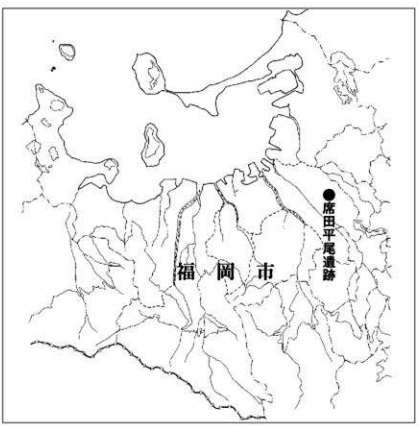
福 岡 市 教 育 委 員 会

むしろ だ ひら お

席田平尾遺跡 1

－第１次調査報告－

福岡市埋蔵文化財調査報告書　第1404集



調査番号　1726
遺跡略号　MAH-1

2020

福岡市教育委員会

序

古くから大陸文化を受け入れる窓口として栄えていた福岡市には、数多くの文化財が存在しています。福岡市教育委員会では、開発に伴いやむを得ず失われていく埋蔵文化財について、事前に発掘調査を実施し、記録による保存に努めているところです。

本書は、福岡空港内で車両整備工場建設に伴い行われた席田平尾遺跡第１次発掘調査について報告するものです。今回の調査では奈良時代の水田跡や河川の跡が発掘されました。

本書が市民の皆様の埋蔵文化財に対するご理解を深める一助となりますとともに、学術研究の分野で役立つことができれば幸いに存じます。

最後になりましたが、発掘調査から本書の刊行にいたるまで、ＪＡＬエアテック様をはじめ、多くの方々のご理解とご協力を賜りましたことに、心より感謝申し上げます。

令和２年３月25日

福岡市教育委員会

教育長　星子　明夫

例　言

1．本書は、福岡市博多区大字東平尾字杭田718-1（福岡空港内）の車両整備工場建設に伴い、福岡市教育委員会が2017（平成29）年10月18日から12月28日にかけて発掘調査を実施した席田平尾（むしろだひらお）遺跡第１次調査の報告書である。
2．遺構の呼称は記号化し、溝→ＳＤ、その他→ＳＸとした。遺構番号は種類に関係なく連番とした。また、水田、畦畔、杭列はそれぞれアルファベットで区別した。
3．本書に使用した遺構実測図は田上勇一郎が作成した。遺物実測図は平田春美が作成した。また、製図には篠田千恵子、増永好美、本田浩二郎、田上があたった。
4．本書に使用した写真は田上が撮影した。
5．本書に使用した標高は海抜高である。
6．本書に使用した方位は座標北である。
7．本書の編集・執筆は田上が行った。
8．本調査にかかわるすべての遺物・記録類は、福岡市埋蔵文化財センターにおいて、収蔵・公開される予定である。

調査番号	1726			遺跡略号	MAH－１
調査地地籍	博多区大字東平尾字杭田718－１（福岡空港内）			分布地図番号	雀居　23
開発面積	2,200㎡	調査対象面積	756㎡	調査面積	740㎡
調査期間	2017（平成29）年10月18日～12月28日				

目　次

Ⅰ　はじめに …… 1
1．調査にいたる経緯 …… 1
2．調査の組織 …… 1
3．調査地点の立地と環境 …… 2

Ⅱ　調査の記録 …… 4
1．調査の経過と概要 …… 4
2．第1面の調査 …… 8
3．第2面の調査 …… 12
4．第3面の調査 …… 14

Ⅲ　まとめ …… 16

挿図目次

Fig. 1　周辺の遺跡と調査地点の位置（1/25,000）…… 3
Fig. 2　調査区域図（1/2,000）…… 4
Fig. 3　調査区北壁土層図（1/50）…… 5
Fig. 4　調査区南壁土層図（1/50）…… 6
Fig. 5　第１面遺構分布図（1/200）…… 7
Fig. 6　ＳＤ０１土層図（1/40）…… 8
Fig. 7　ＳＤ０１・０３出土遺物実測図（1/3）…… 9
Fig. 8　杭列Ａ実測図（1/40）…… 10
Fig. 9　第１面水田出土遺物実測図（1/3）…… 10
Fig.10　第２面遺構分布図（1/200）…… 11
Fig.11　杭列Ｂ・Ｃ実測図（1/40）…… 12
Fig.12　第３面遺構分布図（1/200）…… 13
Fig.13　第３面水田足跡実測図（1/40）…… 14
Fig.14　杭列Ｄ実測図（1/40）…… 14
Fig.15　杭列Ｅ実測図（1/40）…… 15
Fig.16　周辺調査区と推定旧流路（昭和初期地形図）（1/5,000）…… 16

図版目次

PL.1　（1）第１面水田（南から）
　　（2）調査区南壁ＳＤ０１・
　　ＳＤ０３土層（北から）
PL.2　（1）調査区北壁ＳＤ０１土層（南から）
　　（2）ＳＤ０１中央土層（南から）
PL.3　（1）調査区南壁ＳＤ０１土層（北から）
　　（2）調査区南壁ＳＤ０３土層（北から）
　　（3）杭列Ａ西（南から）
　　（4）杭列Ａ東（南から）
PL.4　（1）第２面水田（南から）
　　（2）杭列Ｂ・Ｃ（北西から）
　　（3）杭列Ｂ・Ｃ（南東から）
　　（4）杭列Ｂ（東から）
　　（5）杭列Ｃ（東から）
PL.5　（1）ＳＤ０５（南から）
　　（2）畦畔Ａ（南から）
PL.6　（1）第３面水田（南から）
　　（2）畦畔Ｂ（南から）
　　（3）畦畔Ｂ（北西から）
　　（4）畦畔Ｄ（東から）
　　（5）畦畔Ｆ（北から）
PL.7　（1）水田⑦足跡検出状況（南から）
　　（2）水田⑦足跡掘削状況（南から）
PL.8　（1）水田⑦足跡掘削状況（西から）
　　（2）杭列Ｄ北（西から）
　　（3）杭列Ｄ南（西から）
　　（4）杭列Ｅ（西から）

Ⅰ　はじめに

1．調査にいたる経緯

福岡市教育委員会は2017（平成29）年２月１日付けで、株式会社ＪＡＬエアテックより、福岡市博多区大字東平尾字杭田781番地１における車両整備工場建設に伴う埋蔵文化財の有無についての照会を受理した。

これを受けて経済観光文化局文化財部埋蔵文化財課事前審査係では、申請地が上牟田遺跡の範囲内であることから確認調査が必要と判断した。確認調査は８月28日に実施し、２面の水田遺構を確認した。

確認調査の結果をふまえ、申請者と遺跡の取り扱いについて協議を行い、建築工事によって影響がある部分を対象に本調査を実施することで合意した。

その後、2017（平成29）年10月11日付けで株式会社ＪＡＬエアテックを委託者、福岡市長を受託者として埋蔵文化財発掘調査業務委託契約を締結し、同年10月18日より12月28日まで発掘調査を実施し、2018・2019（平成30・31・令和元）年度に資料整理および報告書作成を行った。

なお、上牟田遺跡の上牟田という地名は今回の調査地点から大きく離れているため、2017（平成29）年10月27日付けで大字東平尾にあたる範囲を席田平尾遺跡に名称を変更している。

2．調査の組織

発掘の調査・整理にあたっての組織は以下の通りである。

調査委託	株式会社ＪＡＬエアテック		
調査主体	福岡市教育委員会		
	（発掘調査：平成29年度・資料整理：平成30・31・令和元年度）		
調査総括	福岡市経済観光文化局文化財部（30年度より文化財活用部）		
	埋蔵文化財課	課長	常松幹雄（29年度）
			大庭康時（30年度）
			菅波正人（31・令和元年度）
		調査第１係長	吉武　学
庶　務	文化財保護課	管理調整係長	藤　克己（29年度）
		管理調整係	松尾智仁（29年度）
	文化財活用課	管理調整係長	藤　克己（31・令和元年度）
			松原加奈枝（31・令和元年度）
事前審査	埋蔵文化財課	事前審査係長	本田浩二郎
		事前審査係主任文化財主事	池田祐司（29年度）
			田上勇一郎（30・31・令和元年度）
		事前審査係文化財主事	中尾祐太（29・30年度）
			朝岡俊也（30・31・令和元年度）
調査担当	埋蔵文化財課	調査第１係主任文化財主事	田上勇一郎（29年度）
整理担当	埋蔵文化財課	事前審査係主任文化財主事	田上勇一郎（30・31・令和元年度）

3．調査地点の立地と環境

席田平尾遺跡は御笠川が形成する沖積平野の東際に立地し、東には月隈丘陵が南北に延びている。

月隈丘陵上には数多くの遺跡が残されている。弥生時代の前期の甕棺・木棺墓群である下月隈天神森遺跡からはじまり、前期末～後期初頭の国指定史跡である金隈遺跡、研ぎ分けの中細形銅剣が副葬されていた中期の上月隈遺跡、中期後半～後期初頭の下月隈Ｂ遺跡・席田青木遺跡などの墳墓群や、大型掘立柱建物がある久保園遺跡、銅鐸鋳型が出土した席田大谷遺跡（赤穂ノ浦遺跡）などの集落遺跡がある。古墳時代後期には席田青木古墳・北ノ浦古墳・宝満尾古墳・水町古墳・今里不動古墳などの単独墳や貝花尾古墳群・新立表古墳群・席田大谷古墳群・丸尾古墳群・下月隈天神森古墳群・立花寺古墳群などの小規模な古墳群、影ヶ浦古墳群や堤ヶ浦古墳群、持田ヶ浦古墳群などの群集墳が存在している。古代では立花寺遺跡で７世紀の総柱建物や長舎建物、区画溝が（５・６次調査）、９世紀の総柱建物群や長舎建物が検出され、越州窯青磁や邢州窯白磁、緑釉陶器などが出土している（２次調査）。席田郡内西側を通る大宰府水城東門へ続く官道に置かれた「久遜駅」もしくは『古今著聞集』に見える「薤田駅」に関連する遺跡と考えられる。

御笠川東岸の沖積平野上には雀居遺跡や下月隈Ｃ遺跡といった弥生時代早期～古墳時代前期の集落遺跡が微高地上に営まれており、古代以降は水田として利用されている。古墳時代では５～６世紀の集落が立花寺Ｂ遺跡（６次調査）で確認されている。古代では緑釉陶器や粗製の越州窯系青磁が出土し、官衙的施設が想定される９世紀後半～ 10世紀の立花寺Ｂ遺跡（２次調査）、10 ～ 11世紀の集落が発見された雀居遺跡（２・３・８次調査）がある。

1944（昭和19）年に旧陸軍が民有地を接収し、席田飛行場として整備する以前は条里地割を留める水田が広がっていた。席田郡の条里地割は西に37°振れている。

席田平尾遺跡は福岡空港内にあり、本格的な発掘調査は今回が初めてである。近隣の調査は北西200mで席田青木遺跡７次調査地点、南250mで久保園遺跡４次調査地点が存在する。どちらの遺跡も大部分は丘陵部に立地するが、この２か所の調査地点は低地部にあたる。

席田青木遺跡７次調査は2009（平成21）年に航空機給油関係大型車両の整備工場新設に伴い422㎡を対象に行われた。

残りが悪いものの、標高4.2 ～ 4.6mで８世紀後半の水田３枚と南北方向の自然流路を確認している。水田区画のおおよその方位は条里地割と異なっており、地割施行前の水田と考えられる。

「萬」と墨書された須恵器の皿が自然流路から出土している。

久保園遺跡４次調査は2008（平成20）年～ 2010（平成22）年に航空機駐機場増設に伴い6,300㎡を対象に行われた。

第１面は８世紀後半～９世紀の水田や流路、水溜状の大型土坑などが検出された。８世紀後半に丘陵からの土で客土し、長方形区画の水田が構築されている。水田には人間やウシなどの偶蹄類の足跡が認められ、畦畔および畦畔を補強したと考えられる杭列が確認されている。水田区画は条里地割と合致している。水田からは「宋」の墨書がある須恵器の高台付椀が出土している。水溜状の大型土坑は流路からの導水した水を溜める、水田に給水する、流路の氾濫時の緩衝および水溜めの役割が想定されている。水溜遺構の一つからは「十」、「向」、「上」などの文字が書かれた墨書須恵器が８点出土している。

第２面では弥生時代中期中葉～古墳時代前期の掘立柱建物、溝、自然流路、水田など、第３面では弥生時代中期前葉の溝が検出された。

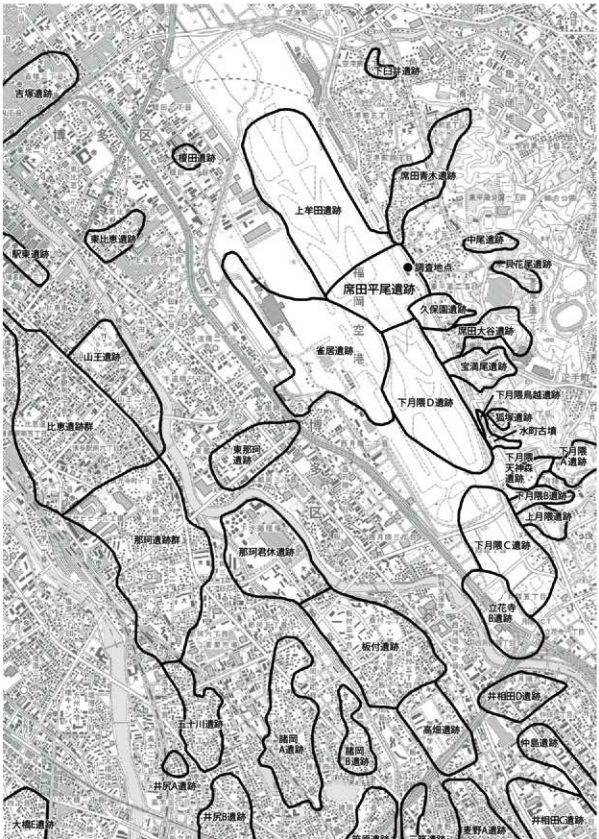


Fig.1　周辺の遺跡と調査地点の位置（1／25,000）

Ⅱ　調 査 の 記 録

1．調査の経過と概要

調査区は車両整備工場建設で影響のある756㎡を対象とした。確認調査の時点からすでに１m掘り下げられており、雨水がたまっている状況であった。

10月18～23日重機による表土除去を行い、20・23日に機材の搬入などを行った。24日より人力による発掘調査を開始、以前の建物基礎や試掘トレンチなどを掘り上げたのち、第１面の調査を行った。測量用のグリッドは東側の空港内道路の方向に合わせ、５m方眼で設定した。第１面では水田面と自然流路などを確認した。自然流路の掘り上げは土量が多くなったため南側では一部、重機を利用した。11月27日に第１面の全景写真を撮影した。

11月30日からは重機により第２面へ掘り下げた。溝１条と杭列が検出されたが第２面の水田は残りが悪かった。12月12日に第２面の全景写真を撮影し、その後杭列の断ち割り調査を行った。

確認調査では２面の水田面が確認されていたが、第２面より下にも水田面が認められたため、12月14日より重機で第３面へと掘り下げた。確認調査での２面の水田面は第２面と第３面に該当するようである。第３面の水田は畦畔らしき高まりや足跡とみられるくぼみが発見された。19日に全景写真を撮影したのち、調査区北壁・南壁沿いにトレンチを掘削した。21日に杭列の断ち割り調査と発掘区北壁・南壁の土層図作成を完了した。25日には重機を用いダメ押しのトレンチを入れ、下層に遺構がないことを確認した。27日までに埋め戻しを行い、12月28日に現地での作業を完了した。出土遺物は土器・石器がコンテナケース２箱分、杭がコンテナケース18箱分である。

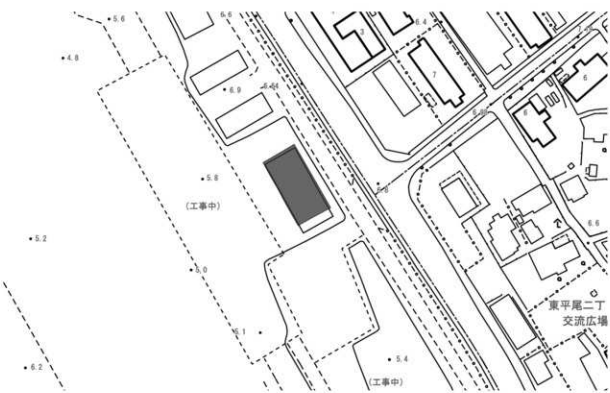
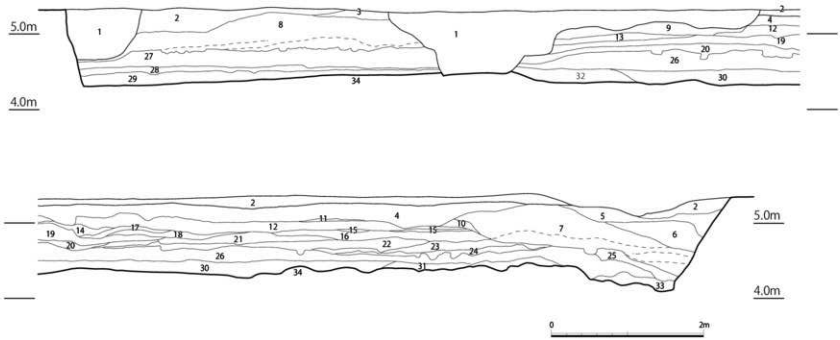
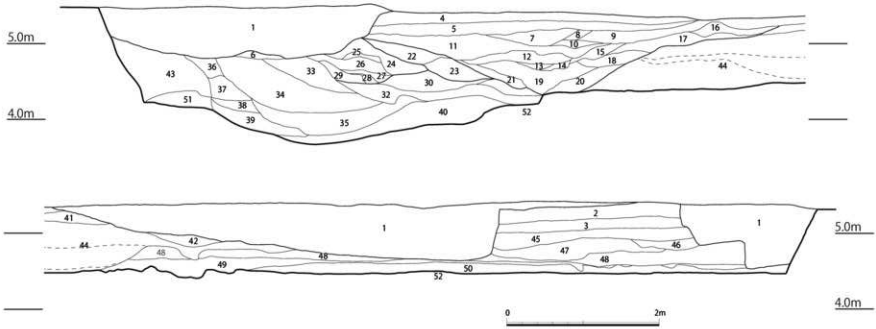


Fig.2　調査区域図（1／2,000）



1. 撹乱
2. 盛土
3. 灰褐色シルト
4. 灰褐色シルト～褐色粗砂
5. 灰色シルト　粗砂含む
6. 灰白色粗砂　灰色シルトブロック含む
7. 灰白色粗砂　下部は中粒砂で灰色シルト層状に含む
8. 微白色粗砂　灰白色シルト層状に含む
9. 白色粗砂
10. 青白色シルト
11. 褐色砂
12. 灰色シルト～粘土
13. 白色砂　灰色シルト層状に含む
14. 白色砂
15. 灰白色細砂　灰色シルト層状に含む
16. 灰色シルト　灰白色細砂層状に含む
17. 灰白色細砂～シルト　層状に堆積
18. 白色砂～灰白色シルト　層状に堆積
19. 灰白色シルト～白色細砂　層状に堆積
20. 白色砂　灰色シルト層状に含む
21. 灰色シルト　白色細砂層状に含む
22. 白色砂～灰色砂
23. 灰白色細砂　灰色シルト層状に含む
24. 白色粗砂
25. 灰色シルト　灰色砂をブロック状に含む
26. 灰色粘土
27. 黒灰色混砂シルト　青灰色シルト層状に含む
28. 灰黒色砂
29. 暗灰色粘土
30. 暗褐色混土砂
31. 灰色混砂粘土
32. 青白色粘土　灰色砂交じり
33. 青白色粘土　灰色粘土ブロック多く含む
34. 青白色粘土

Fig.3　調査区北壁土層図（1／50）



1. 攪乱
2. 灰色粘土
3. 黄褐色粘土
4. 黄褐色混砂粘土
5. 黄灰白色砂質土
6. 灰白色礫砂
7. 灰褐色混砂シルト
8. 黄白色砂
9. 灰色混砂粘土
10. 黄灰白色砂
11. 暗灰色粘土　礫砂層状に含む
12. 暗灰色混土砂
13. 灰白色粗砂
14. 暗灰色混砂シルト
15. 暗灰色シルト
16. 灰白色粗砂
17. 黄灰色シルト
18. 暗灰色粘土
19. 白色粗砂
20. 灰白色砂～粗砂　暗灰色粘土ブロック含む
21. 灰色シルト
22. 白色粗砂
23. 白色砂
24. 暗灰色～灰白色シルト
25. 白灰色シルト
26. 白灰色シルト～白色砂
27. 暗灰色シルト
28. 白色砂
29. 暗灰色～灰白色シルト
30. 白色粗砂
31. 灰白色粗砂
32. 灰白色礫砂
33. 白色砂～礫砂
34. 白色砂～粗砂
35. 白色砂～粗砂　大型暗灰色粘土ブロック含む
36. 暗灰色粘土
37. 灰白色礫砂
38. 暗灰色粗砂　小枝含む
39. 灰白色礫砂
40. 灰白色粗砂　下部に拳大の暗灰色粘土ブロック色含む
41. 灰白色混砂シルト
42. 青白色シルト
43. 白色粗砂
44. 白色粗砂
45. 青灰褐色混砂シルト
46. 青白色混砂シルト
47. 灰白色粗砂
48. 暗灰色粘土
49. 灰黑色砂
50. 灰黑粘土
51. 暗灰色粘土
52. 青白色粘土

Fig. 4　調査区南壁土層図（1／50）

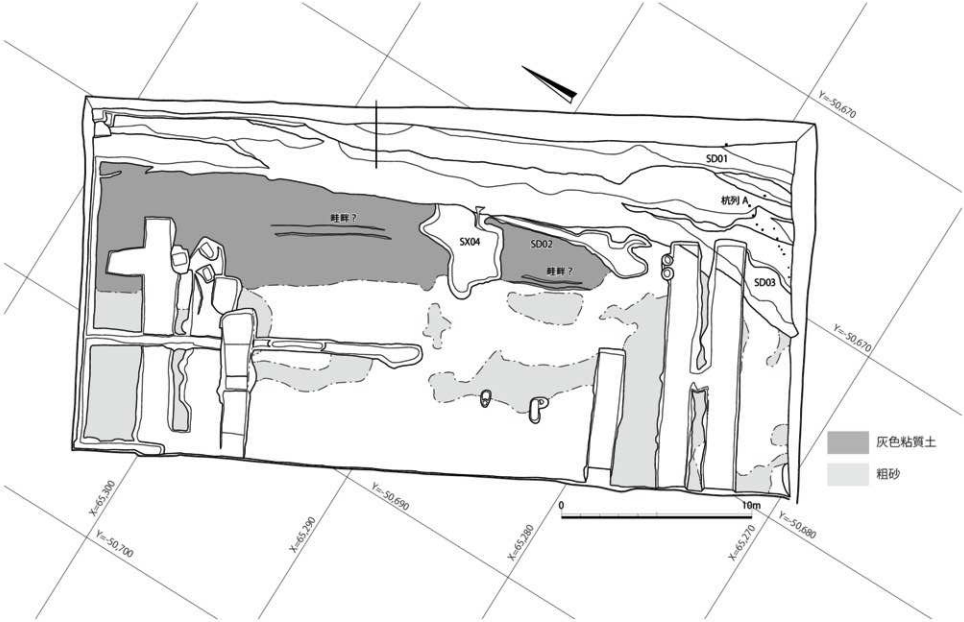


Fig. 5　第１面遺構分布図（1／200）

２．第１面の調査

重機により北東側から遺構面を検出した。Fig.3北壁土層図の４層：灰褐色シルト～褐色粗砂を取り除くと12層：灰色シルト～粘土の層となったため、この面を第１面の水田面とし、広げることにした。標高は5.1 ～ 5.2mである。しかしながら、灰色シルト～粘土の層は北東部しか広がらず、大部分は青灰褐色混砂シルトの層であった（Fig.4南壁土層図の45層）。また、一部は下層の粗砂層が露出した（北壁土層図の８・９層、南壁土層図の47層）。このように第１面水田は非常に残りが悪いため、足跡状のくぼみは残っていない。畦畔とみられる高まりも２か所しか確認できなかった。いずれも南北方向で、高まりは10cmに満たない。

ＳＤ０１・０３

調査区東側では自然流路が確認された。東岸は調査区外に延びる。大部分は粗砂で埋没しているが（Fig.3北壁土層図の６・７層、Fig.6）、南にいくに従い、西岸際の覆土が暗灰色シルト（Fig.4南壁土層図の15層）や暗灰色粘土（同18層）になっているため、水田との境が明瞭ではなかった。底から掘っていくことで流路の岸を押さえることができた。

この自然流路はＳＤ０１として北側から調査を開始したが、出土遺物も少ないため、南側３分の１は重機で掘削することにした。完掘後、調査区南壁で土層観察をしたところ、同じく白色粗砂を覆土とする（Fig.4南壁土層図の44層）ＳＤ０３と重複していることが判明した。ＳＤ０３はＳＤ０１より古く、やや東に振れて南北に流れている。

出土遺物をFig.7に示す。**１**～**５**は調査区北側で出土しているのでＳＤ０１出土のものであろう。**６**～**15**は調査区南側出土で、ＳＤ０１・０３のいずれかの出土である。

１は須恵器甕。口縁部の小片である。復元口径20cm、残存高4.2cm。**２**は須恵器の小型甕。口縁部の小片である。口縁直下に沈線が２条めぐる。焼成はやや不良で、表面は灰色だが内部は赤褐色を呈する。復元口径15cm、残存高3.3cm。**３**は須恵器の椀。口縁部から体部の小片で復元口径13.6cm、残存高2.8cm。**４**は土師器の坏である。残存率80％。口径10.6cm、底径5.1cm、器高4.4cm。内外面にミガキ調整。外面体部下半はケズリのちミガキ。**５**は土師器の坏である。残存率30％。口径13.0cm、底径8.0cm、器高4.0cm。表面は摩滅や剥離が著しいが、回転横ナデの痕跡が見られる。**６**は須恵器の坏身である。残存率20％。復元口径12.0cm、残存高6.0cm。**７**は須恵器の坏蓋の摘み部分である。焼成はやや不良で、表面は灰色だが内部は赤褐色を呈する。胎土に白色砂粒を多く含む。摘み径3.0cm、残存高1.3cm。**８**は須恵器の坏身。高台部と底部の小片で復元高台径9.0cm、残

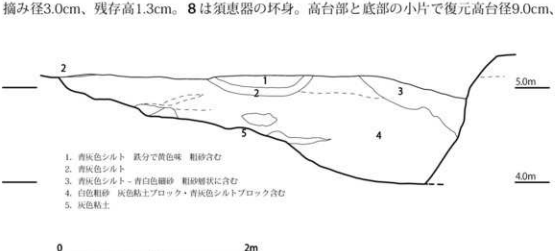


Fig.6　ＳＤ０１土層図（１／40）

存高1.5cm。焼成は不良で灰白色から灰橙色を呈し、軟質である。**9**は土師器の椀。残存率40％。内外面に丁寧なミガキ調整。外面黒塗り。復元口径18.2cm、残存高5.5cm。**10**は土師器の坏である。残存率20％。器面は摩滅している。復元口径14.4cm、残存高3.3cm。**11**も土師器の坏である。残存率20％。器面は摩滅しているが内外面にミガキ調整が認められる。外面黒塗り。復元口径13.0cm、底径7.0cm、残存高3.5cm。**12**も土師器の坏である。残存率20％。内外面にミガキ調整。復元口径14.4cm、残存高3.3cm。**13**は土師器の皿である。残存率40％。回転ヨコナデで底部はケズリのちナデ。灰白色を呈し、口縁付近は暗灰色。復元口径17.2cm、復元底径14.6cm、器高2.3cm。**14**も土師器の皿である。残存率30％。内外面にミガキ調整。復元口径18.6cm、復元底径15.0cm、器高2.0cm。**15**は土錘。灰白色を呈する。摩滅しているが完形である。長さ3.7cm、最大径1.8cm。

以上の出土遺物はおもに８世紀後半の時期である

杭列A

調査区南東で検出した杭列である。４ｍの間に11本確認した。７本と４本の２列になるかもしれない。３～５cmの丸太杭が打ち込まれている。杭は最長70cm残存している。杭の先端はＳＤ０１の岸の傾斜と併行しているのでＳＤ０１に関連するものであろう。

ＳＤ０２

南北方向の小溝。幅50cm、深さ８cmで南側は浅くなり、形状が不定形となる。北側はＳＤ０１に切られる。土師器の小片が小ビニール袋半分ほど出土している。

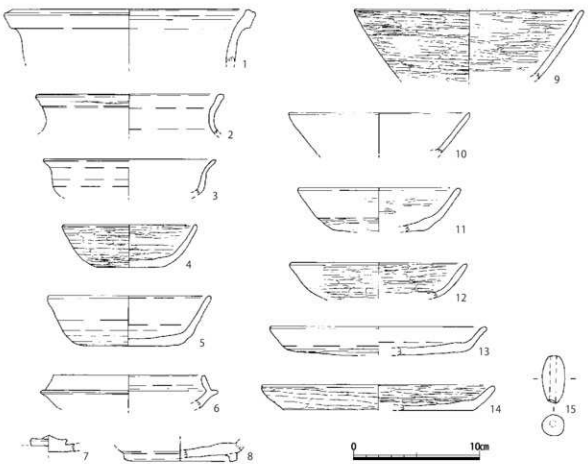


Fig.7　ＳＤ０１・０３出土遺物実測図（１／３）

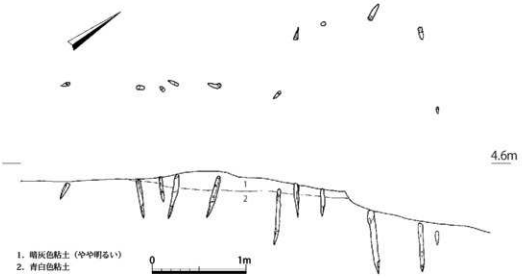


Fig.8　杭列A実測図（1／40）

ＳＸ０４

調査区中央やや東寄りで検出された10cmほどの段落ち。残存していたひとつ下の水田面かもしれない。

水田面

最初に述べた通り、第１面の水田は非常に残りが悪く、足跡状のくぼみは残っていない。また、畦畔とみられる高まりも２か所しか確認できなかった。いずれも南北方向で、高まりは10cmに満たない。

第１面水田面からの出土遺物をFig.9に示す。

16は須恵器の坏身である。残存率90％。口径13.3cm、高台径9.2cm、器高4.1cm。**17**は土師器の坏身である。残存率30％。器面は摩滅しているが内面にミガキ調整が認められる。外面体部下半はケズリの痕跡。復元高台径8.4cm、残存高5.3cm。**18**も土師器の坏身である。残存率30％。器面は摩滅しているが内面にミガキ調整が認められる。復元口径13.6cm、復元底径8.0cm、器高3.9cm。

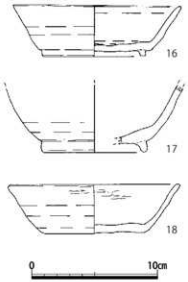


Fig.9　第１面水田出土遺物実測図（1／3）

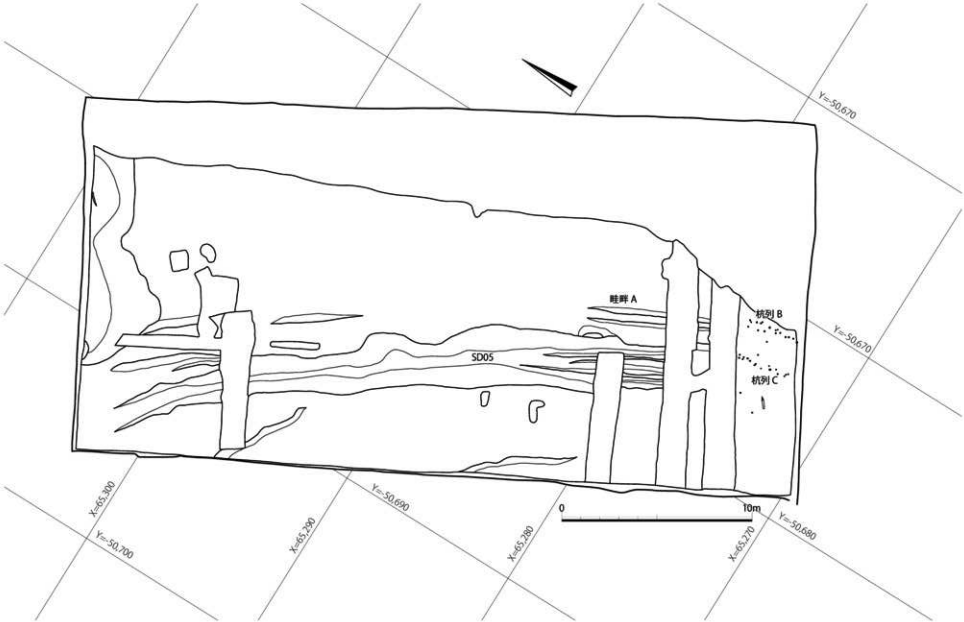


Fig.10　第２面遺構分布図（１／200）

３．第２面の調査

標高4.8 ～ 4.9mで第２面の調査を行った。Fig.3北壁土層図の25・26・27層、Fig.4南壁土層図の48層上面にあたる。

ＳＤ０５

調査区中央やや西寄りで検出した南北方向の溝である。幅２～３ｍ、深さ10 ～ 20cm。白色粗砂で埋没している。南側は３条に分かれる。北側は浅くなり確認できなくなる。土師器の小片が小ビニール袋半分ほど出土した。

水田面

第２面の水田面も足跡状のくぼみは認められず、畦畔の残りも悪い。畦畔Ａは南北方向に6.5ｍ分確認した。残りの良いところで幅１ｍ、高さ10cmである。また、調査区北側にも帯状の高まりがあり、畦畔の可能性がある。水田の出土遺物は土師器の小片５点のみである。

杭列Ｂ・Ｃ

調査区南部の水田面で検出した杭列である。東側の杭列Ｂは2.5mの間に17本、西側の杭列Ｃは2.9mの間に16本確認された。３～６cmの丸太杭が打ち込まれている。杭は最長1.2m残存している。第１面のＳＤ０３に併行しているのでＳＤ０３に関連するものであろう。

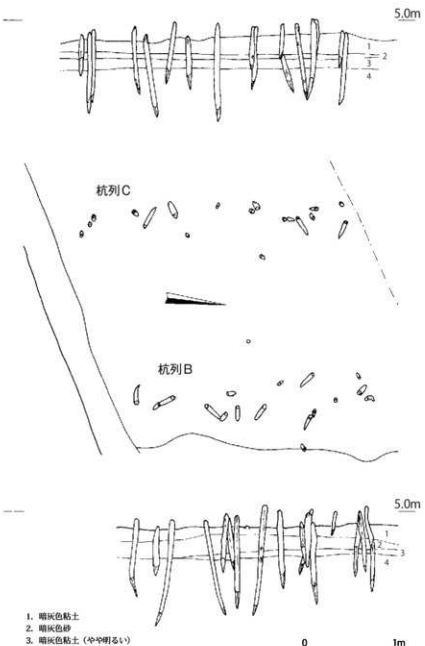


Fig.11　杭列Ｂ・Ｃ実測図（１／40）

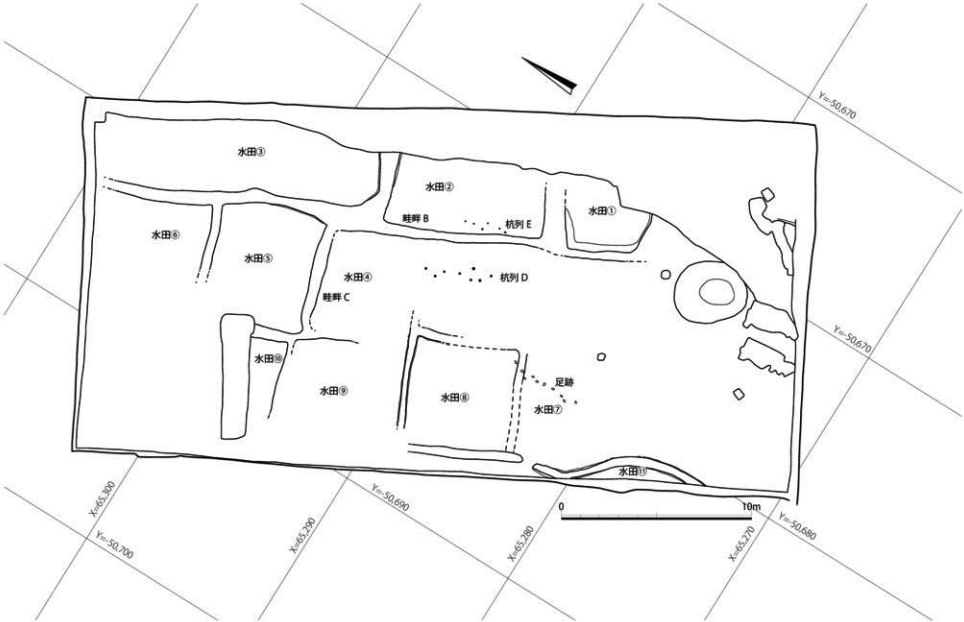


Fig.12　第３面遺構分布図（１／200）

4．第３面の調査

標高4.5 ～ 4.6mで第３面の調査を行った。Fig.3北壁土層図の29 ～ 32層、Fig.4南壁土層図の50層上面にあたる。

水田面

第３面の水田面は他の面に比べ残りが良く、足跡状のくぼみが部分的に残り、歩行を追えるところがある。畦畔は高まりはほとんどないものの、水田区画を復元できる部分がある。

水田は南北方向に３列確認できた。東側の列は東側をＳＤ０１に切られている。水田①は南北2.2m以上、東西2.0m以上。北に接する水田②は南北4.0m、東西2.0m以上。さらに北に接する水田③は南北7.5m以上、東西1.8m以上で北側は調査区外に延びる。東西方向の畦畔が確認できていないだけで、２～３枚の水田であろう。

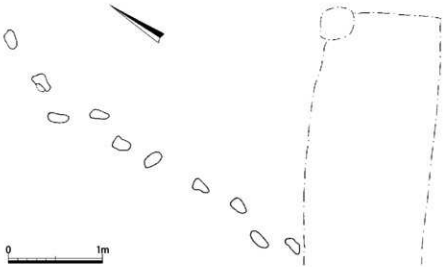


Fig.13　第３面水田足跡実測図（１／40）

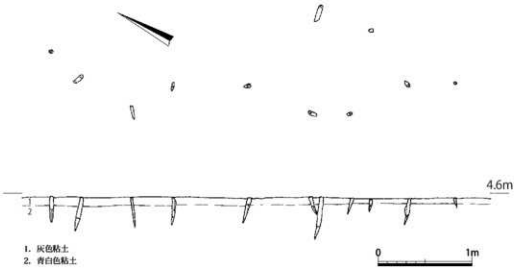


Fig.14　杭列Ｄ実測図（１／40）

中央列の水田は３枚確認された。水田④は南側の畦畔が確認されておらず、東西2.3m。北に接する水田⑤は南北2.6m、東西3.1m。さらに北に接する水田⑥は西側の畦畔が確認されておらず、北側は調査区外に延びる。南北3.0m以上。

西側の列は４枚確認された。水田⑦は東側・南側の畦畔が確認できず規模不明。北へ向かう足跡が10歩分確認された。北に接する水田⑧は南北2.8m、東西2.7m。さらに北に接する水田⑨は西側の畦畔が確認されておらず、南北3.0m。さらに北側の水田⑩は北側・西側の畦畔が確認できず規模不明。

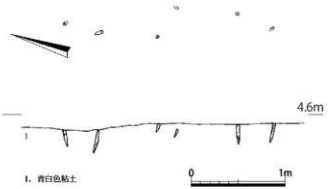


Fig.15　杭列Ｅ実測図（１／40）

西側列の更に西側にもう一列水田が確認できる（水田⑪）。

水田の出土遺物は須恵器・土師器の小片が小ビニール袋１袋分である。

杭列Ｄ

中央列の水田④の南で検出された南北方向の杭列である。4.3mの間に11本の杭を確認した。２～５cmの丸太杭が打ち込まれている。杭は最長50cm残存している。先端部分のみの杭もあり、第３面水田よりも上層より打ち込まれているものと考えられる。第１面水田の南側の畦畔の可能性のある高まりの延長上に位置しており、補強の杭かも知れない。

杭列Ｅ

東列の水田②で検出された南北方向の杭列である。2.3mの間に６本の杭を確認した。２～４cmの丸太杭が打ち込まれている。杭はいずれも先端部分のみであり、最長25cmしか残存していない。第３面水田よりも上層より打ち込まれているものと考えられる。第１面ＳＤ０１に併行しているのでＳＤ０１に関連するものであろう。

Ⅲ　まとめ

福岡空港内は1944（昭和19）年以降、飛行場という制約があり埋蔵文化財の空白地であった。空港西側に国際線ターミナルを移転するために行われた1991（平成３）年の試掘調査で雀居遺跡が発見され、低地部である空港内に遺跡があるということがはじめて確認された。以来、空港西側での施設建設に伴い確認調査が行われ、遺跡に影響がある場合は発掘調査（雀居遺跡２次～ 19次）が行われている。

また、滑走路部分でも掘削工事が行われる場合は夜間に工事立会を行い、遺跡の確認を続けている。しかしながら、面積が広大であるため詳細はまだ把握できていない。

今回の調査地点は上牟田遺跡という名称で空港北側を広く囲っていた埋蔵文化財包蔵地での初めての本格的な調査となった。上牟田遺跡は広すぎるため、今回大字東平尾に含まれる南側を席田平尾遺跡として分割した。

今回の調査では３面の水田面を確認することができた。

第１面の水田面は調査区東側を流れる流路の氾濫で埋没している。流路から出土する須恵器や土師器から８世紀後半を想定しているが、出土遺物が少なく確かではない。第２、第３面の水田は第１面水田をさかのぼるわけであるが、出土遺物が少なく時期の確定はできない。第３面水田から須恵器が出土しているので古墳時代後期以降であるのは間違いない。

席田郡の条里地割は西に37°振れるのであるが、今回の水田区画は第３面で20 ～ 25°と一致せず、かすかな畦畔が残る第１、第２面も一致しない。北側の席田青木遺跡第７次調査の水田と同じく地割施行前の水田なのであろうか。

今回確認された自然流路ＳＤ０１は南側の久保園遺跡４次調査Ⅰ区ＳＤ０００２・Ⅲ・Ⅳ区ＳＤ０５０１と北側の席田平尾遺跡７次調査００２流路の中間にあたる。ほぼ同時期であり、旧河川流路を復元するうえで重要な手掛かりとなった。

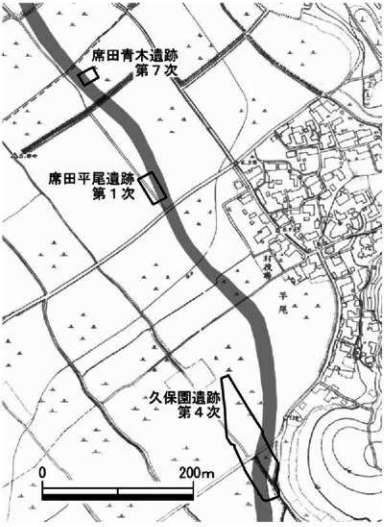


Fig.16　周辺調査区と推定旧流路（昭和初期地形図）（1/5,000）

図　版

（1）第１面水田（南から）

（2）調査区南壁ＳＤ０１・ＳＤ０３土層（北から）

（1）調査区北壁ＳＤ０１土層（南から）

（2）ＳＤ０１中央土層（南から）

（1）調査区南壁ＳＤ０１土層（北から）

（2）調査区南壁ＳＤ０３土層（北から）

（3）杭列Ａ西（南から）

（4）杭列Ａ東（南から）

（1）第２面水田（南から）

（2）杭列Ｂ・Ｃ（北西から）

（3）杭列Ｂ・Ｃ（南東から）

（4）杭列Ｂ（東から）

（5）杭列Ｃ（東から）

（1）ＳＤ０５（南から）

（2）畦畔Ａ（南から）

（1）第３面水田（南から）

（2）畦畔Ｂ（南から）

（3）畦畔Ｂ（北西から）

（4）畦畔Ｄ（東から）

（5）畦畔Ｆ（北から）

（1）水田⑦足跡検出状況（南から）

（2）水田⑦足跡掘削状況（南から）

（1）水田⑦足跡掘削状況（西から）

（2）杭列D北（西から）

（3）杭列D南（西から）

（4）杭列E（西から）

報告書抄録

ふりがな	むしろだひらおいせき
書　　名	席田平尾遺跡
副 書 名	第１次調査報告
巻　　次	
シリーズ名	福岡市埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	1404
編 著 者 名	田上勇一郎
編 集 機 関	福岡市教育委員会
所 在 地	〒810-8621　福岡市中央区天神１丁目８－１　TEL　092-711-4667
発行年月日	2020年3月25日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 (世界測地系)	東経 (世界測地系)	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
むしろだひらおいせき 席田平尾遺跡	ふくおかけんふくおかし 福岡県福岡市 はかたくおおあざひがしひらお 博多区大字東平尾	40132	2894	33° 35′ 15″	130° 27′ 15″	20171018 ～ 20171228	740	車両整備 工場建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
席田平尾遺跡	生産 遺跡	古代	水田　杭列 自然流路	土師器　須恵器　杭	

要　　約	席田平尾遺跡の初めての調査である。 調査では３面の水田面を確認することができた。 第１面の水田は８世紀後半の遺物を含む流路の氾濫の粗砂で埋没する。畦畔の残りは悪く水田規模は確認できなかった。第２面の水田も畦畔の残りは悪く水田規模は確認できなかった。第３面の水田は畦畔の残りは悪かったが、いくつかの水田の規模を確認できた。また、水田面に残る足跡も確認できた。須恵器が出土していることから古墳時代後期以降の水田である。いずれの水田も席田郡の条里地割と一致せず、地割施行以前の水田と考えられる。 第１面で確認された自然流路は周辺の調査と合わせて旧河川流路を復元する手掛かりとなった。

席田平尾遺跡 1

－第１次調査報告－
福岡市埋蔵文化財調査報告書　第1404集

2020年3月25日

発　行　　福岡市教育委員会
福岡市中央区天神１丁目８－１
印　刷　　正光印刷株式会社
福岡市西区周船寺３丁目28番１号

MUSHIRODA HIRAO SITE 1

– Results of the first excavation of the Mushiroda Hirao site –

Report of Archaeological Investigations of Fukuoka City, Vol.1404

2020

THE BOARD OF EDUCATION OF FUKUOKA CITY